

聖徒伝 124

「あなたは主を 恐れているか」

歴代誌第二 17～20章

ヨシャファテ王の生涯

アウトライン

0. イントロダクション

I. 宗教改革 17章

II. アハブとの共闘 18~19章

III. モアブとの戦い 20章

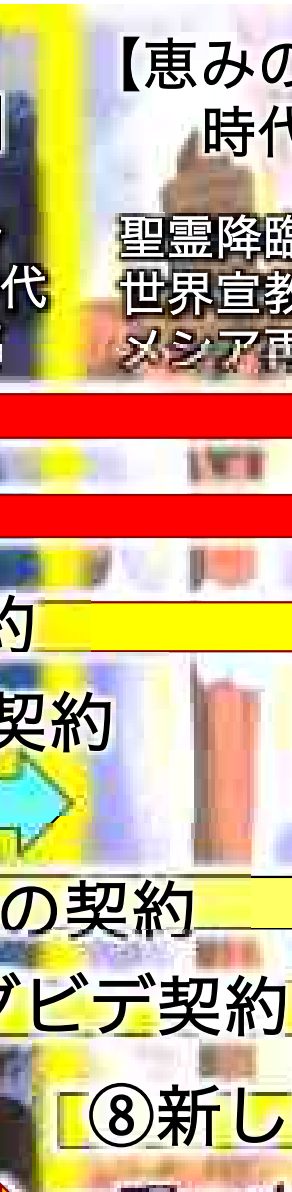
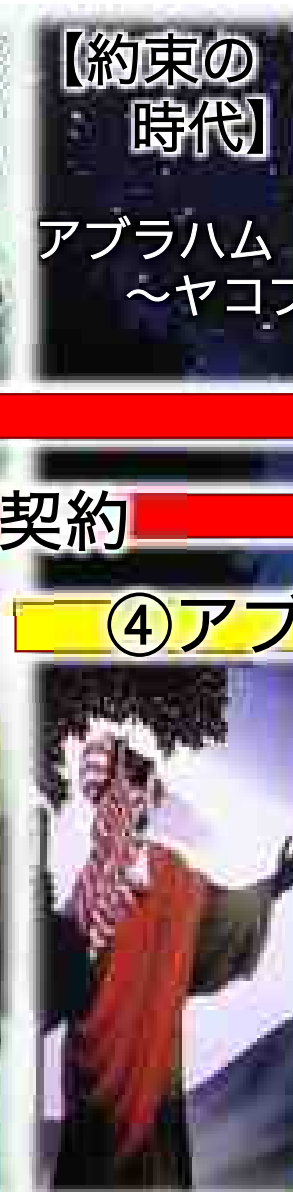
IV. まとめと適用

懲らしめの主の愛をこそ

味わい知ろう



死海の湖岸



【無垢の時代】

天地創造

【良心の時代】

墮罪
~大洪水

【人類統治の時代】

バベルの塔事件

【約束の時代】

アブラハム
~ヤコブ

【律法の時代】

イスラエル
王国時代
メシア初臨

【恵みの時代】

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

【御国の時代】

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

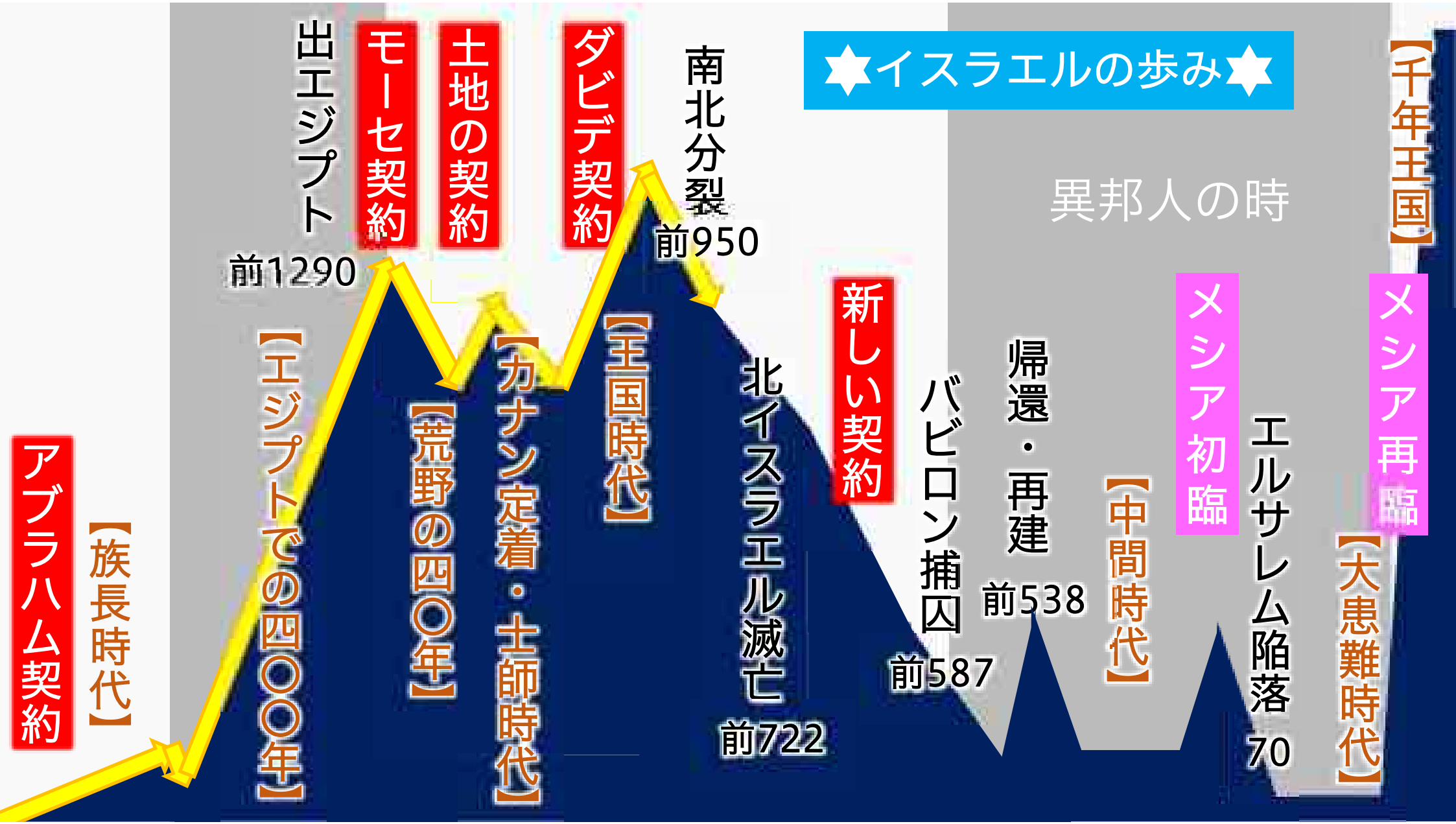
どの時代も
神の約束が礎にある

過去

現在

未来

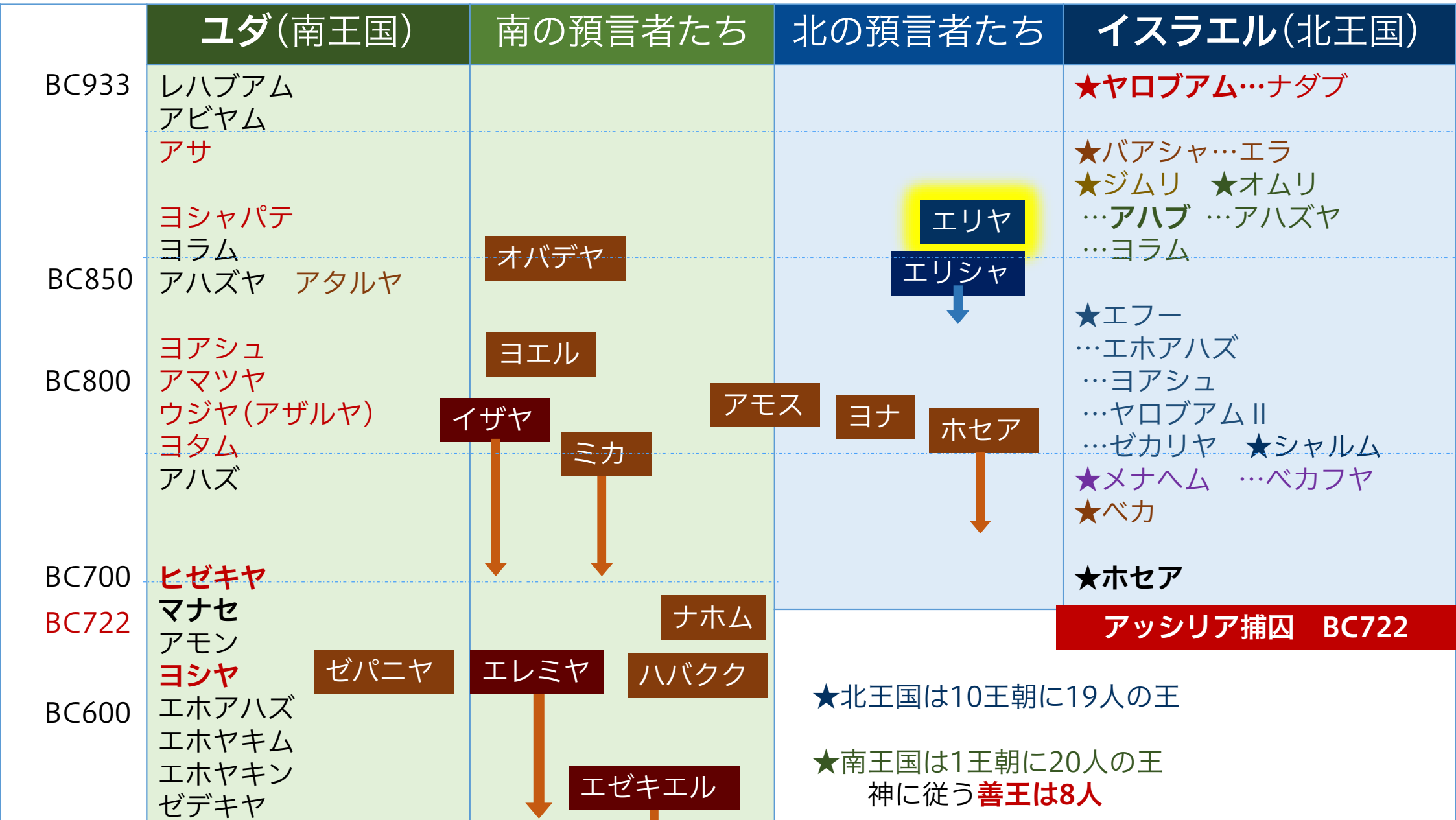
★イスラエルの歩み★



列王記 (第一〜第二)

第一	1〜11章	ソロモン王の治世 神殿建築	イスラエル(統一王国)		
	12〜16章	王国の分裂	ユダ(南王国)	イスラエル(北王国)	
第二	17〜22章	預言者エリヤ (アハブ王の生涯)	レハブアム アビヤム アサ ヨシャパテ ヨラム アハズヤ アタルヤ ヨアシュ アマツヤ ウジヤ ヨタム アハズ ヒゼキヤ マナセ アモン ヨシヤ エホアハズ エホヤキム エホヤキン ゼデキヤ	オバデヤ ヨエル イザヤ ミカ エレミヤ エゼキエル	ヤロブアム…ナダブ バアシャ…エラ ジムリ オムリ…オムリ…アハブ …アハズヤ…ヨラム エフー…エホアハズ …ヨアシュ …ヤロブアムII …ゼカリヤ シャルム メナヘム ベカフヤ ベカ ホセア
	1〜2章			エリヤ エリシャ アモス ヨナ ホセア	
	2〜13章	預言者エリシャ			
	14〜17章	二つの王国の歴史 北王国滅亡まで			
	18〜25章	ユダ王国の歴史 滅亡まで			

★北王国は10王朝に19人の王
★南王国は1王朝に20人の王



北王国 イスラエル

南王国 ユダ

北王国最悪の時代 🦴

エリヤ エリシャ

【エフー王朝】

エフー 28年 エホアハズ 17年 ヨアシュ

イゼベル 🦴

【オムリ王朝】

オムリ 12年 VII アハブ 🦴 22年 ヨラム アハズヤ 2年 12年

対極的な二人の王

アサ ♡ IV ヨシャパテ ♡ 25年 アタルヤ 6年 ヨラム 8年

ヨアシュ ♡ 40年 ウジャ

オバデヤ

アハズヤ 1年

北王国・イスラエル と 南王国・ユダ

- **北王国**は、すべての王が「ヤロブアムの道」をひた走り、偶像礼拝に。最悪の時代をもたらしたのが、**アハブ王**と悪女イゼベルだった。
- **南王国**は、初代レハブアム、2代目アビヤと悪の道に進んだが、3代目**アサ王**が主に立ち返り、偶像を王国から取り除いた。**アサ王**の晩年の過ちは、北王国バアシャの侵略に際して、異邦人のアラムに助けを求めたことだった。この報いで**アサ王**は病死した。
- 続く4代目の**ヨシャパテ**は、**アハブ王**と同時代に生きながら、主の道を歩み、**南王国**は繁栄を極めることとなる。



I. 宗教改革

歴代誌第二 17章

エルサレム神殿

【南の四代目ヨシャファテ】 Ⅱ 歴代誌17:1~2

彼(アサ)に代わって、彼の子ヨシャファテ*が王となり、イスラエルに対して勢力を増し加えた*。

彼はユダにあるすべての城壁のある町々に軍隊を置き、ユダの地と、彼の父アサが攻め取ったエフライムの町々*に守備隊を置いた。

*“ヤハウエは裁かれた” 四代目ヨシャファテ王。

*父アサの代には、北のバアシャ王に侵略された。

→南王国の敵は、第一に北王国だった。

*助けを求めたアラムの侵略の際に奪い取った。

→主に信頼しなかった罪でアサ王は病死。



【善王ヨシャファテ】 II 歴代誌17:3~4

【主】はヨシャファテとともにおられた。彼がその先祖ダビデの最初の道*に歩いて、バアルの神々に求めず、父祖の神に求め、その命令にしたがって歩み、イスラエルの行いに倣わなかった*からである。

*主を恐れ、律法を遵守し、主に従う道

*ヤロブアムの道をさらに突き進んだアハブとは対極。



【南王国の繁栄】 II 歴代誌17:5～6

【主】は、王国を彼の手によって確立された。ユダの人々はみなヨシャファテに貢ぎ物を持って来たので、彼には富と誉れが豊かに与えられた。

彼の心は【主】の道*を大いに誇りとし、彼はさらに、高き所*とアシェラ像をユダから取り除いた。

*律法を守り、主に従う道。

*各地の高台に設けられた祭壇。神殿建設後、役目を終えたはずが、偶像礼拝の祭壇に!!



【ヨシャファテの統治】 II 歴代誌17:7~8

彼はその治世の第三年に、彼の高官たち、ベン・ハイ
ル、オバデヤ、ゼカリヤ、ネタンエル、ミカヤを遣わ
して、ユダの町々で教えさせた。

彼らとともにレビ人も同行した。すなわち、シェマヤ、
ネタンヤ、ゼバデヤ、アサエル、シェミラモテ、ヨナ
タン、アドニヤ、トビヤ、トブ・アドニヤなどのレビ
人である。また、彼らとともに、祭司のエリシャマと
ヨラムも同行した。



■ 行政官と祭司・レビ人が一体となって**律法教育**に!!

➔ 律法(モーセ五書)の学びが、王国の礎に!!

信仰者の土台は
聖書研究

【主の恐れ】 II 歴代誌17:9~10

彼らはユダで教えた。【主】の律法の書*を携え、ユダのすべての町を巡回して、民の間で教えた。

【主】の恐れが、ユダの周りの地のすべての王国にあったので、ヨシャファテに戦いを仕掛ける者はいなかった。

*律法(トーラー。モーセ五書)

■主を恐れ、主に従う南王国を主は大いに繁栄させ、周辺の国々までもが、主への恐れを抱いた。

→主の証し人として、本来あるべき姿。



ダビデの時代を
彷彿とさせる

【異邦人の貢ぎ物】 II 歴代誌17:11~12

ペリシテ人の中には、ヨシャファテに貢ぎ物*と税としての銀を持って来る者があり、アラビア人も雄羊七千七百匹、雄やぎ七千七百匹を彼に持って来た。

こうして、ヨシャファテはしだいに並外れて強大になり、ユダに城塞や倉庫の町々を築いた。

*異邦人が貢ぎ物を持ってきたのは、ソロモン以来。

→長年イスラエルを苦しめ続けてきた

強国ペリシテすら、南王国に貢ぎ物を!!

*初出。荒野の遊牧民の総称だろう。



【ヨシャファテの戦士たち】 Ⅱ 歴代誌17:13~14

彼には、ユダの町々で多くのなすべき工事*があった。
また、エルサレムには勇敢な戦士たち*がいた。

彼らの父祖の家ごとの登録は次のとおりである。ユダでは、千人隊の長たち、隊長アデナ。その配下には勇士三十万人。次に隊長ヨハナン。その配下には二十八万人。

*城壁や飢饉や攻城戦のための備蓄食料の倉庫を建設

*戦士たちの名が連ねられるのもダビデの治世以来。

➔具体的な記述は王の治世の正しさ、確かさの証し。



【主に忠実な戦士たち】 II 歴代誌17:16~19

その次は、自ら進んで【主】に身を献げたジクリの子アマスヤ*。その配下には二十万人の勇士。

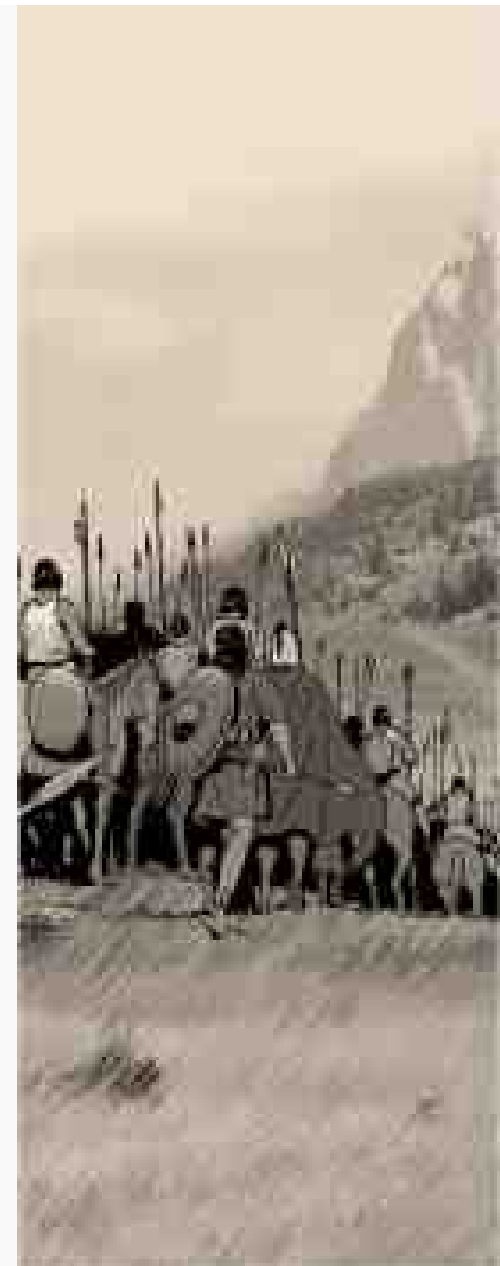
ベニヤミンからは、勇士エルヤダ。その配下には、弓と盾を取る者が二十万人。次に、エホザバデ。その配下には十八万人の武装した者。

これらが王に仕えた人々である。このほかに、王がユダ全土の城壁のある町々に配属した人々がいた。

*“主は力強い” サムエルのように主に献身した？

■兵の総数は、116万人。南だけで荒野時代の二倍。

→軍事力でも歴代最強だった。





II. アハブとの共闘

列王記第二 18～19章

決戦の舞台ヨルダン川東岸

【アハブと結んだ姻戚関係】 II 歴代誌18:1~3

ヨシャファテには富と誉れが豊かに与えられたが、彼はアハブと姻戚関係*に入った。

*アハブとイゼベルの娘アタルヤが、

ヨシャファテの息子ヨラムに嫁いできた。

→アタルヤは、後に母イゼベル並みの悪女に!!

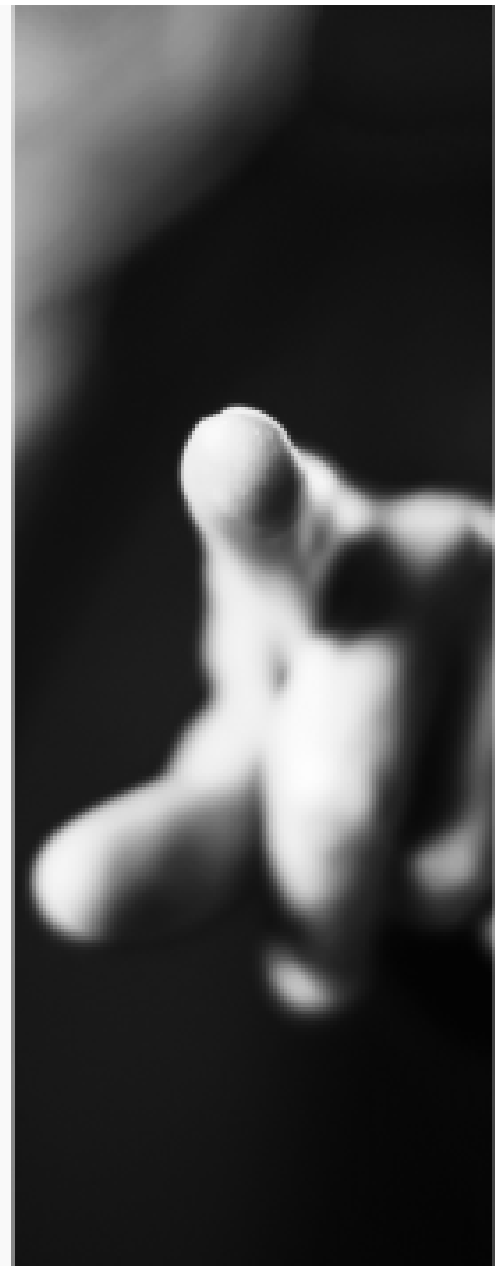
■北王国のアハブを表敬訪問したヨシャファテに、アハブは、**アラム**との戦いへの協力を求めた。

■元々イスラエルの土地だったラモテ・ギルアデを取り返すという戦いに、ヨシャファテは賛同した。



【ミカヤの預言】 II 歴代誌18:4~27

- ヨシャファテがアハブに、主の言葉を求めさせると、イスラエルの預言者400人が集められ、口々に勝利を告げ、アラムとの戦いをそそのかした。
- 不審に感じたヨシャファテが、他に預言者はいないのかと問うと、引き出されたのがミカヤだった。
- アハブに憎まれていたミカヤは、真実を告げた。アハブの死と敗戦を告げる内容だった。アハブはミカヤを投獄すると、出陣した。



【アハブ王の死】 II 歴代誌18:28～34

- アハブは王服を脱いで変装していた。敵に攻め囲まれたヨシャファテは、主に助け求め、救い出された。
- アハブは、流れ矢に急所を射貫かれながら、戦いの終わる夕刻まで戦車の中に立ち続けて、死んだ。
- 王の戦車は池で洗われ、その血を犬がなめた。アハブに告げられたエリヤの預言が成就した。「アハブに属する者で、町で死ぬ者は犬がこれを食らい、野で死ぬ者は空の鳥がこれを食らう。 I 列21:24」



【帰還したヨシャファテ】 II 歴代誌19:1

ユダの王ヨシャファテは、無事にエルサレムの自分の家に帰った。ハナニの子、先見者エフー*が、ヨシャファテ王の前に進み出て言った。

*ヨシャファテの父アサ王の時代に、
北の3代目バアシャに滅びの宣告をしている。



【ヨシャファテへの警告】 II 歴代誌19:2~3

「**悪者**を助け、**【主】**を憎む者を愛するというのですか。このことのゆえに、あなたの上に、**【主】**の前から怒りが下ります。しかし、あなたには良いことも認められます。あなたはこの地からアシェラ像を取り除き、心を定めて神を求めてこられました。」

■人のとれる選択は、二つに一つ。

主を愛するか。 **↔** 主を憎むか。

■決して相容れない、人の二つの道がある。



【さばき人】 II 歴代誌19:4~5

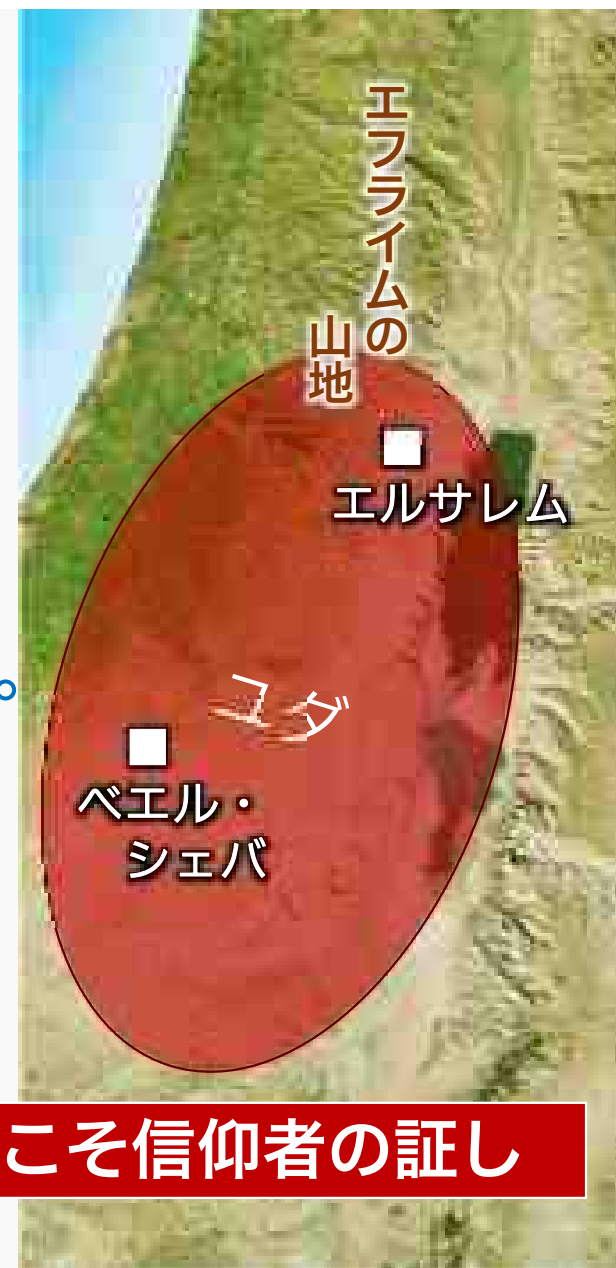
ヨシャファテはエルサレムに住んでいたが、彼はもう一度ベエル・シェバからエフライムの山地に至る民の中に出て行き、彼らを父祖の神、【主】に立ち返らせた。

彼はこの地、すなわち、ユダにあるすべての城壁のある町に、それぞれの町のさばき人*を任命した。

*町の行政官、裁判官、議長(長老たちの長)。

■ヨシャファテは、悔い改めて、よりいっそう忠実に主に仕えたことが分かる。

悔い改めてこそ信仰者の証し



【さばきは、主のため】 II 歴代誌19:6~7

彼はさばき人たちにこう言った。「あなたがたは自分のすることに注意しなさい。あなたがたがさばくのは、人のためではなく、【主】のためだからだ。この方は、さばきが行われるとき、あなたがたとともにおられる。

今、【主】への恐れがあなたがたにあるように。忠実に行いなさい。私たちの神、【主】には、不正をすることも、えこひいきをすることも、賄賂を取ることもないからだ。」

■ 民が主を恐れ、主の名が讃えられるために。



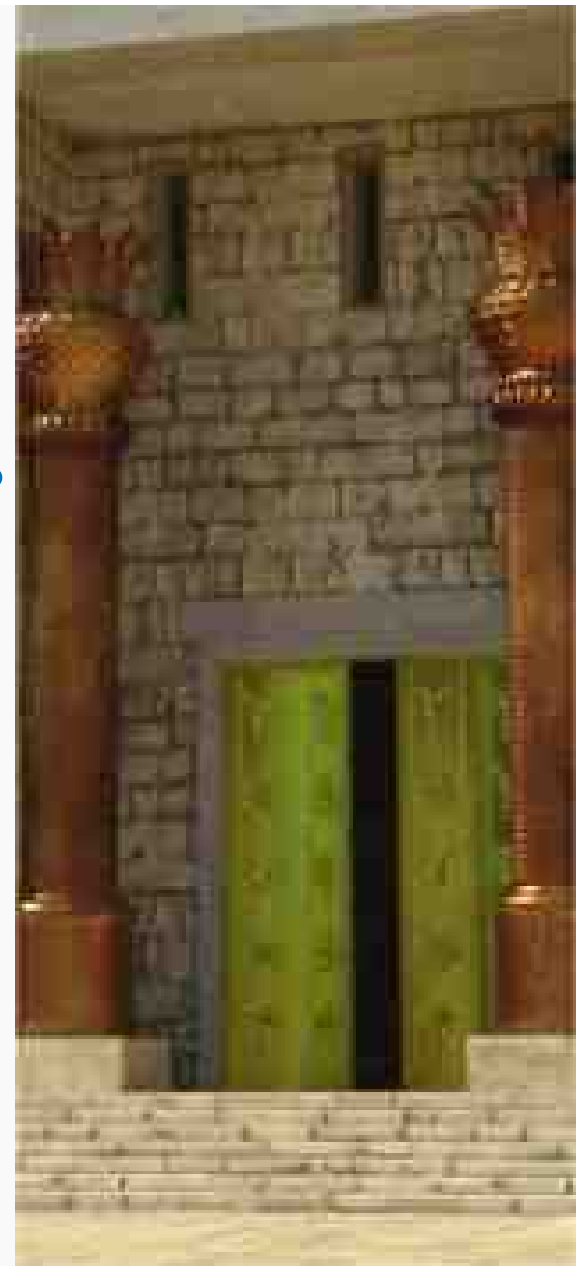
【エルサレムでのさばき】 II 歴代誌19:8~9

ヨシャファテは、エルサレムにおいても、レビ人と祭司たちの中から、またイスラエルに属する氏族のかしらたちの中から、【主】のさばきと訴訟に携わる者たちを任命した。彼らはエルサレムに住んだ。

ヨシャファテは彼らに次のように命じた。「あなたがたは【主】を恐れ、真実と全き心をもって、このように行わなければならない。」

■ 第一に抱くべきは、主への恐れ。

主は、偽りなく聖なる真実の方である。

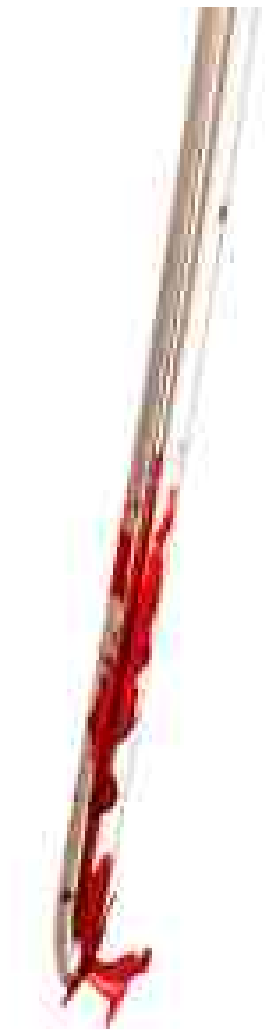


【さばきの基準は主】 Ⅱ 歴代誌19:10

それぞれの町に住んでいるあなたがたの兄弟たちから、**流血の事件**について、あるいは律法、命令、掟、定めについて、あなたがたのところに訴訟が持ち込まれた場合にはいつでも、あなたがたは、彼らが【主】に対して責めを負わないように、またあなたがたとあなたがたの兄弟たちの上に御怒りが下ることのないように、彼らに警告しなさい。そのように行えば、あなたがたが責めを負うことはない。

■ 不義、不公正な裁きは、当事者にも、さばき人にも
主の怒りが下る結果に。

担った使命を果たしているか



【主に仕える者の責任】 II 歴代誌19:11

「見よ。祭司アマルヤはあなたがたの上に立つかしらで、【主】の事柄*全体に関して責任を持つ。また、ユダの家の長イシュマエルの子ゼバデヤは王の事柄*全体に関して責任を負う。さらに、レビ人たちは、あなたがたの前でつかさとなる。勇気を出して**実行**しなさい。【主】が**善***を行う者ととともにいてくださるように。」

*神殿の祭儀、けがれの判定。宗教裁判。 *国政。

*神に従う行い。この時代には、何より律法の遵守。

信仰者に求められるのは、主にある実行力!!





III. モアブとの戦い

列王記第二 20章

エン・ゲディ

【モアブとアンモンの侵略】 II 歴代誌20:1~2

その後のことであった。モアブ人とアンモン人*、および彼らに合流した一部のアンモン人が、ヨシャファテと戦おうとして攻めて来た。

すると、人々は来て、ヨシャファテに次のように告げた。「海の向こうのアラムから、大軍があなたに向かって攻めて来ました。早くも、彼らはハツエツオン・タマル、すなわちエン・ゲディ*にきています。」

*近親相姦で生まれたアブラハムの甥口トの子孫。

➡律法は、彼らとの交わりを禁止(申23:3)

*ダビデが逃れていた死海沿岸のオアシス



エン・ゲディ

【ヨシャファテの恐れと断食】 II 歴代誌20:3~4

ヨシャファテは恐れた*。そして心に決めて【主】を求め、ユダの全土に断食*を呼びかけた。ユダの人々は集まって来て、【主】の助けを求めた。実にユダのすべての町から人々が来て、【主】を求めたのである。

*アハブと共闘した罪の刈り取りだと悟ったのだろう。

➔近親の背教者に協力し、近親の民族の侵略を受けた。

*断食は、主への深い悔い改めのしるし。

■王の呼びかけに応じ、ユダ全体が悔い改めて、ただ主に助けを求めた。



【ヨシャファテの祈り】 II 歴代誌20:5~7

ヨシャファテは、【主】の宮にある新しい庭の前で、ユダとエルサレムの集団の中に立って、こう言った。「私たちの父祖の神、【主】よ。あなたは天におられる神*ではありませんか。あなたはすべての異邦の王国を支配なさる方*ではありませんか。あなたの御手には勢いと力があり*、あなたに立ち向かえる者はだれもいません*。私たちの神よ。あなたは、この地の住民をあなたの民イスラエルの前から追い払い、とこしえにあなたの友アブラハムの裔にお与えになった*のではありませんか。」

主を知らずして
力ある祈りは不可能

■主の偉大なご性質*をたたえ、主の約束*に訴えた。

【ヨシャファテのとりなし】 II 歴代誌20:8~9

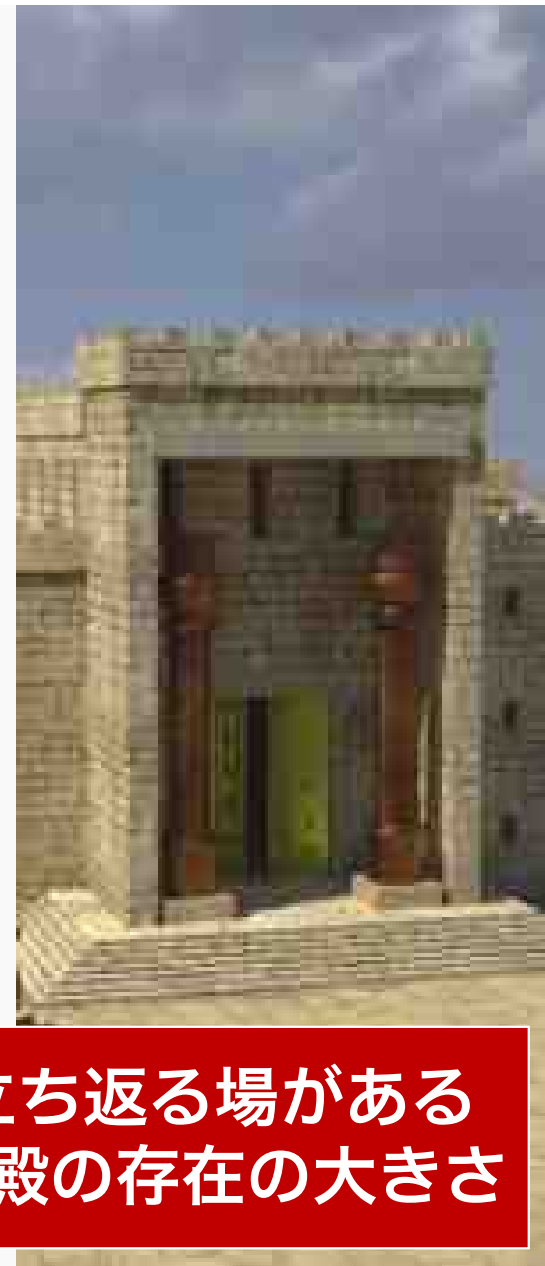
彼らはそこに住み、あなたのため、御名のために、そこに聖所を建てて言いました。

『もし、さばきの剣、疫病、飢饉などのわざわいが私たちを襲うなら、私たちは**この宮**の前、あなたの御前に立ちます。あなたの御名が**この宮**にあるからです。そして、私たちは苦難の中からあなたに叫びます。あなたは聞いて、お救いくださいます。*』

* **神殿**奉獻でのソロモンの祈り (I 列8:33~, II 歴6:28~)

■ アブラハム、ソロモン、先祖たちへの神の約束に訴えかけ、とりなし祈るヨシャファテ

立ち返る場がある
神殿の存在の大きさ



【荒野の出来事の回帰】 II 歴代誌20:10

ところが今、アンモン人、モアブ人、およびセイル山の人々をご覧ください。かつてイスラエルがエジプトの地から出て来たとき、あなたは彼らの地に入っていくことをお許しになりませんでした*。それで、イスラエルは彼らを避け、彼らを滅ぼさなかったのです。

■ モーセの荒野の時代、主は、近親の民族と戦うことを禁じられた。



セイルの山地

【ヨシャファテのとりなし】 II 歴代誌20:11~12

「ご覧ください。彼らが私たちにしようとしていることを。彼らは、あなたが私たちに相続させてくださったあなたの所有地*から、私たちを追い払おうとしてやって来たのです。

私たちの神よ。彼らをさばいてくださらないのですか。攻めて来るこの大軍に当たる力は、私たちにはありません*。私たちとしては、どうすればよいのか分かりません。ただ、あなたに目を注ぐのみです。」

*約束の地は、主がイスラエルに与えられた神聖な地。

*自らの無力さを告白し、主の助けを求めた。



【主の霊】 Ⅱ 歴代誌20:13~14

ユダの人々はみな【主】の前に立っていた。彼らの幼子たち、妻たち、子どもたちもともにいた。

ときに、【主】の霊が会衆の中で、アサフ族の出であるレビ人ヤハジエル*の上に臨んだ。彼はマタンヤの子エイエルの子ベナヤの子ゼカリヤの子である。

*“神を見よ”

【主の言葉】 Ⅱ 歴代誌20:15～16

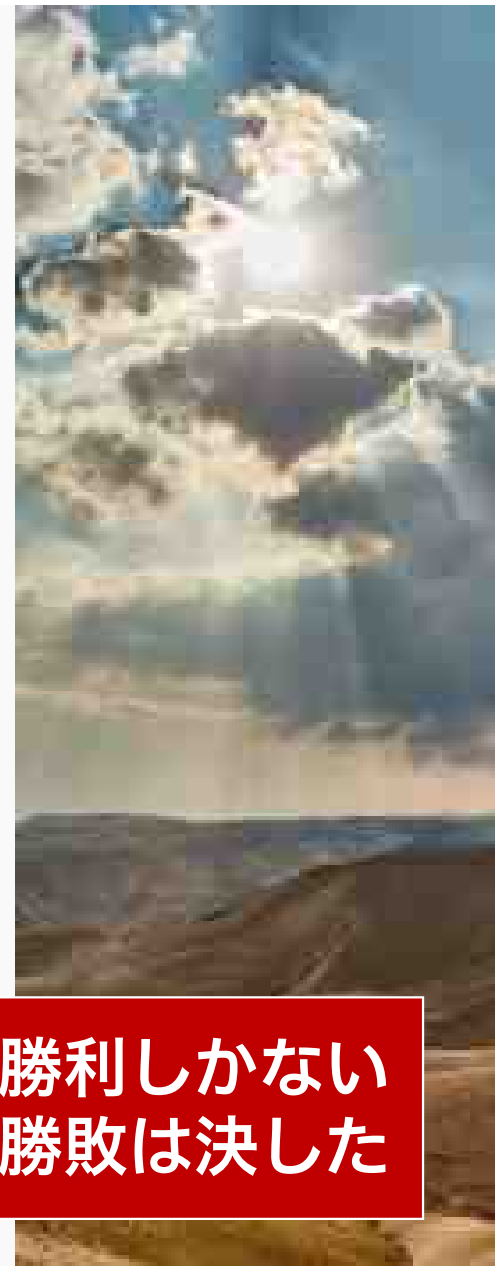
彼は言った。「ユダのすべての人々、エルサレムの住民、およびヨシャファテ王よ、よく聞いてください。

【主】はあなたがたにこう言われます。『この大軍のゆえに恐れてはならない。おののいてはならない。これはあなたがたの戦いではなく、神の戦いである。

明日、彼らのところに攻め下れ。見よ、彼らはツイツの坂を上って来る。あなたがたはエルエルの荒野の前、谷の外れで彼らに出会う。』

■ ヨシャファテが正しくとりなし祈り、主が応えられた。

神の戦いに勝利しかない
この時点で勝敗は決した



【神の民の使命】 II 歴代誌20:17~19

『この戦いは、あなたがたが戦うのではない。堅く立って、あなたがたとともにおられる【主】の救いを見よ*。ユダとエルサレムよ、恐れてはならない。おののいてはならない。明日、彼らに向かって出陣せよ。

【主】はあなたがたとともにおられる。』」

ヨシャファテは地にひれ伏し、ユダのすべての人々とエルサレムの住民も【主】の前にひれ伏して、【主】を礼拝*した。ケハテの子孫、コラの子孫であるレビ人たちは立ち上がり、大声をあげてイスラエルの神、

【主】を賛美*した。

■救いの御業の証人*となり、主を礼拝*、賛美*する。



【主を信じなさい】 II 歴代誌20:20~21

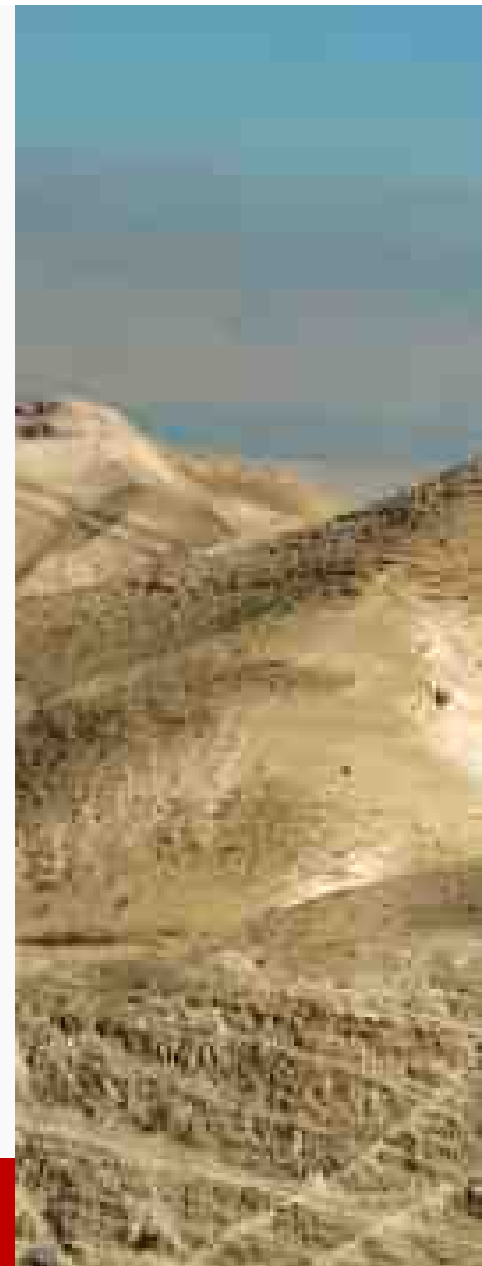
こうして、彼らは翌朝早く、テコアの荒野へ出陣した。出陣のとき、ヨシャファテは立ち上がって言った。

「ユダおよびエルサレムの住民よ、私の言うことを聞け。あなたがたの神、【主】を信じなさい。そうすれば、あなたがたは堅く立つことができる。主の預言者たちを信じ、勝利を得よ。」

彼は民と相談し、【主】に向かって歌う者たちと、聖なる装いをして賛美する者たちとを任命した。彼らが武装した者の前に出て行って、こう言うためであった。

「【主】に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。」

主を信頼し、主に感謝し、主を讃えるのみ!!



【戦い】 II 歴代誌20:22～23

彼らが喜びと賛美の声をあげ始めると、【主】は伏兵を設けて*、ユダに攻めて来たアンモン人、モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、彼らは打ち負かされた。

アンモン人とモアブ人は、セイル山の住民たちに立ち向かい、これを絶滅させ、根絶やしにした。セイルの住民を滅ぼし尽くすと、彼らは互いに戦って滅ぼし合った。

*主が戦術を与え、民は従い、忠実に実行した。

■主に信頼し、主を讃え、礼拝をささげたならば、主に従い、実行あるのみ。主が成果をもたらされる。



【勝利】 II 歴代誌20:24～26

ユダの人々が、荒野に面した見張り場の上って、その大軍の方を見渡すと、なんと、死体が野に転がっていた。逃れた者は一人もいなかった。

ヨシャファテとその民が分捕り物を奪いに行くと、そこで数多くの武具、衣服、高価な器具を見つけたので、運びきれないほどはぎ取った。分捕り物があまりにも多かったので、奪うのに三日もかかった。

四日目に、彼らはベラカの谷*に集まり、そこで【主】をほめたたえた。それゆえ、人々はその場所の名をベラカの谷*と呼んで、今日に至っている。

*“祝福(贈り物)の谷”



【凱旋】 II 歴代誌20:27～28

ユダとエルサレムの人々はみな、ヨシャファテを先頭にして、喜びのうちにエルサレムに凱旋した。【主】がその敵のことで彼らに喜びを与えられたからである。

彼らは琴、豎琴、ラッパを携えてエルサレムに入り、【主】の宮に行った*。

*戦いは、主の宮で始まり、主の宮で終わった。

→最初から最後までささげられていた礼拝



【地に下った恐れ】 II 歴代誌20:29～30

【主】がイスラエルの敵と戦われたと聞くと、地のすべての王国に神の恐れが下った。

ヨシャファテの治世は平穏であった。神は周囲の者から彼を守り、安息を与えられた。

- 神の民を通して主の御業が現れ、主への恐れが異邦人にも広がった。
- 主が、主を信頼して戦った民に安息を与えられた。

安息の恵みは、主の戦いを戦った結果



【ヨシャファテの治世】 II 歴代誌20:31～32

このようにして、ヨシャファテはユダを治めた。彼は三十五歳で王となり、エルサレムで二十五年間、王であった。その母の名はアズバ*といい、シルヒ*の娘であった。

ヨシャファテはその父アサの道に歩み、そこから外れることなく、【主】の目にかなうことを行った。

*“捨てられた” * “武装した”

■ 苦難を味わった女性アズバの息子は、主に信頼する偉大なユダの王となった。

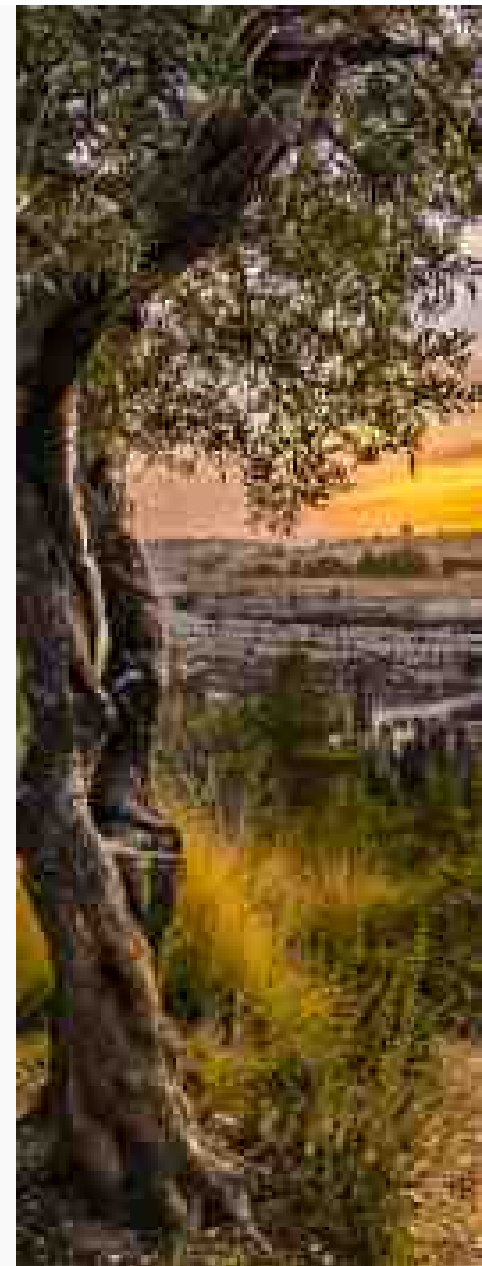


【残った高き所】 II 歴代誌20:33~34

しかし、高き所は取り除かれなかった*。民はなおも、彼らの父祖の神にその心を定めようとしなかった。

ヨシャファテについてのその他の事柄は、最初から最後まで、『イスラエルの王の書』に載せられた『ハナ二の子エフーの働き』にまさしく記されている。

*善王ヨシャファテの治世を経ても、民の偶像礼拝の罪は絶えることなく、くすぶり続けていた。



【ヨシャファテの過ち】 II 歴代誌20:35～37

その後、ユダの王ヨシャファテは、イスラエルの王アハズヤと同盟を結んだ。アハズヤは悪事を行った。

ヨシャファテはタルシシュへ行く船団をつくるために、アハズヤと同盟を結んだ。そして、彼らはエツヨン・ゲベルで船団をつくった。

マレシャ出身のドダワフの子エリエゼルがヨシャファテに向かって次のように預言した。「あなたがアハズヤと同盟を結んだ*ので、【主】はあなたが造ったものを打ち壊されます。」すると、船は難破し、タルシシュへ行くことができなくなった。

*繰り返された罪。ソロモン以来の船団は大失敗に。





IV. まとめと適用

懲らしめの主の愛をこそ味わい知ろう

【ヨシャファテの罪】

■主に仕えた善王ヨシャファテの犯した罪は、
背教者アハブ王の企てに加担したこと。

➔南王国の力を利用して、己の欲望を果たそうとしたアハブ。
神を利用しようとしたアハブは、悲惨な最期を遂げた。

「不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。 IIコリント 6:14」

■それは、寛容なのか？ それともただの妥協なのか？
主の御心なのか？ 自分の勝手な思い込みなのか？

神に従う者の道と 背く者の道は、決して相容れない

【ヨシャファテの罪の刈り取り】

- 信仰者にも、自分自身が蒔いた罪の刈り取りがある。
 - ➔ 近親の背教者に協力し、近親の民族の侵略を受けた。
- ヨシャファテは民と共に、主に立ち返り、深く悔い改めた。
- 主の偉大なご性質をたたえ、主の約束に訴えた。
- 自らの無力さを告白し、主の助けを求めた。
- 主は祈りに応え、ご自身が戦われると告げられた。勝敗は決した。
 - ➔ 主に信頼し、主を讃え、礼拝をささげたならば、あとは主に従い、実行あるのみ。主が成果をもたらされる。

【なぜ、愛の神は、人に蒔いた種の刈り取りをさせるのか】

- その問いは、正当か？ 人間の身勝手な視点で主を裁いてないか？
- 聖書が徹底的に突きつけるのは、人の罪の現実と、神のきよさ。きよい神は、罪人と共存できない。アダムは楽園から追い出された。神の怒りから、罪ある人は誰も逃れられない。これが原則。
- 世界を創造された神は、秩序ある正義の方。悪を放置されない方。義と公正のないところに、愛はない。
 - ➡ 秩序なき、野放図なところには、悪と罪がはびこるだけ。ソドムは滅び、北王国は破滅に向かって突き進んだ。

【あなたに主への恐れがあるか？】

★箴言 1:7 【主】を恐れることは知識の初め。

愚か者は知恵と訓戒を蔑む。

- 主に語りかけられた聖徒たちは皆、例外なく、非常な恐れを感じた。完全にきよい神の前で、滅びゆく罪人の現実を突きつけられた。
→主の前では、ひたすら“ひれ伏す”しかない。常に礼拝の原点。
- 主に罪を突きつけられ、刈り取りを命じられたなら、黙って受け取るしかない。人の側に選択肢はない。

【ただ一つの訴えの手段】

- 人にできるのは、主の憐れみのご性質と、主の約束に訴えること。
ヨシャファテは、アブラハム、ソロモンへの主の約束に訴えた。
- 私たちが訴えるべきは、主イエス・キリストの約束。
“私の罪のために十字架にかけられ、死を打ち破って復活された。”
福音を信じた者は、神の怒りを免れ、永遠の救いを約束されている。
- 義なる神の約束は絶対。神の約束が、神の愛のゆるがぬ土台。

【私たち人間の求める愛と、神の愛の根本的な違い】

- “ありのままのあなたでいい”とは、聖書のどこにも書かれていない。
ありのままのあなた、とは滅ぶべき罪人。それでよいわけがない。
- “ありのままがいい”は、ヒューマニストのスローガンにすぎない。
アハブもイゼベルも、同様に口にし、欲望を正当化していただろう。
- 私たちは主に向き合うとき、真実の自分の姿を突きつけられる。
どうしようもない自分自身に向き合えば、絶望しかない。
→ “力は、私にはない” ヨシャファテのように認めよう。

【成長を促すのが真実の愛】

- 子に自立を促さない、溺愛するだけの親にあるのは、ただの支配欲。子を愛する親は、子の成長を求め、時に懲らしめも与える。約束が、子を育む。真の愛は約束に基づき、懲らしめをも伴うもの。
- 愛の神は、人に約束への遵守を求め、破れば懲らしめを与えられる。福音を信じた私たちには、ただ愛による懲らしめしかないと知ろう。人類が受けるべき最悪の懲らしめは、主イエスが受けられたから。
- 日々、悔い改め、時に主の懲らしめも甘んじて受け、罪の深さを思い知らされつつ、自分自身の信仰を成長させられていこう。

罪の自覚が深まるほどに、味わわされる主の愛がある

詩篇118篇15～27節　メシアの歌

主イエス・キリストの救いの御業を預言した詩篇

詩篇118:15～27 メシアの歌

喜びと救いの声は 正しい者の幕屋の内にある。

【主】の右の手は 力ある働きをする。

【主】の右の手は 高く上げられ

【主】の右の手は 力ある働きをする。

私は死ぬことなく かえって生きて

【主】のみわざを語り告げよう。

【主】は 私を厳しく懲らしめられた。

しかし私を死に渡されはしなかった。

詩篇118:15～27 メシアの歌

義の門よ私のために開け。

私はそこから入り【主】に感謝しよう。

これこそ【主】の門。正しい者たちはここから入る。

私はあなたに感謝します。

あなたが私に答え 私の救いとなられたからです。

詩篇118:15～27 メシアの歌

家を建てる者たちが捨てた 石それが要の石となった。

これは【主】がなされたこと。

私たちの目には不思議なことだ。

これは【主】が設けられた日。

この日を楽しみ喜ぼう。

詩篇118:15~27 メシアの歌

ああ【主】よどうか救ってください。

ああ【主】よどうか栄えさせてください。

祝福あれ【主】の御名によって来られる方に。
私たちは【主】の家からあなたがたを祝福する。

【主】こそ神。主は私たちに光を与えられた。
枝をもって祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

それでも罪をおかすわたしに、主は、こらしめをあたえられます。

さばきの主の愛に、感謝します。わたしに力はありません。

ご聖霊(せいれい)の助(たす)けによって、わたしを変(か)え、

成長(せいちょう)させてください。

あなたの愛とめぐみをますます豊(ゆた)かに

味(あじ)わい知(し)るものとしてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」